

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 13 日現在

機関番号：33908

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370244

研究課題名(和文) 対馬の寺社縁起言説の変容と対外戦争の物語

研究課題名(英文) Change in Tsushima's origin statement of temples and shrines, and relation with a story of a foreign war

研究代表者

徳竹 由明 (Tokutake, Yoshiaki)

中京大学・文学部・教授

研究者番号：30387609

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：主として長崎県立対馬歴史民俗資料館宗家文庫蔵本、対馬市教育委員会文化財課蔵藤氏文書の調査を毎年数回実施、また学会や研究会での研究発表も精力的に実施した。

その結果として、海神社・大吉戸神社といった対馬の神社に纏わる神功皇后「三韓出兵」関連の縁起言説が、中世以前に遡れるものではなく、近世中期以降対馬藩内の知識人たちによって作成され、さらに貿易の不振等の要因による対朝鮮王朝観の悪化を背景として、近世後期により神功皇后「三韓出兵」との関わりの度合いを深めたものへと改編されたものであると結論付けた。応永の外寇・三浦の乱に纏わる縁起言説も、ほぼ同様の背景の下、生成し改編されていたものと思われる。

研究成果の概要(英文)：I investigated materials in Nagasaki prefectural Tsushima reference library of history and folklore and materials of the Tsushima-shi School Board cultural asset department several times every year. And I presented research several times a year at the academic meeting. As the result, I concluded as follows, it can't sail up origin statements of shrines in Tsushima related to the Empress Zingu "dispatching of troops of Three Hans" before the Middle Ages, those origin statements were made by intellectuals of Tsushima feudal clan in the Edo Period middle term, those origin statements were altered by a hate sense to Korea in the Edo Period latter term, origin statements which concerns Invasion in Tsushima by Korea at Oei Period and The Rebellion of Sanpo was also generated and reorganized by a similar background mostly.

研究分野：日本文学

キーワード：対馬藩 宗氏 総宮司職藤氏 神功皇后「三韓出兵」 応永の外寇 三浦の乱 海神社 大吉戸神社

1. 研究開始当初の背景

本研究申請段階において、対馬に伝わる対外戦争に纏わる寺社縁起言説や伝承等の言説についての研究は、例えば神功皇后「三韓出兵」については、一部の郷土史研究家・研究者があたかも歴史的事実であるかの如く論じたり、対馬の民俗や信仰に根差した来歴のあるものであると論じたりしている状況であった。

その中で、鈴木棠三氏(『対馬の神道』1972年1月 三一書房)・永留久恵氏(『対馬古代史論集』1991年3月 名著出版他)のみが近世期の創作であると、ごく簡単に論じていた。そして申請者も、拙論「対馬厳原八幡宮縁起説の変容と神功皇后「三韓征伐」譚」(中京大学『文学部紀要』第47巻2号 2013年3月)へと至る研究の中で、神功皇后「三韓出兵」に纏わる厳原八幡宮神社の縁起言説が、鈴木・永留両氏の説の如く近世対馬の知識人による創作であるという結論を出すに至った。

そこで、対馬の各地に伝わる神功皇后「三韓出兵」に纏わる寺社縁起言説・伝承等の言説のうち、主として寺社の縁起言説を対象として来歴を明らかに、且つ先行論究の少ないモンゴル来襲・応永の外寇・三浦の乱・豊臣秀吉朝鮮侵略等に纏わる寺社縁起言説についても、考察の対象としたいと思うに至った。

2. 研究の目的

本研究は、対馬、及び近世期に対馬藩の出先機関草梁倭館のあった釜山に存した主要な寺院・神社について、まずは近世から近現代にかけて作成された縁起書・寺社誌・地誌・史書・紀行随筆・記録類等に見られるそれぞれの対外戦争に纏わる縁起言説を収集し、比較対照する。その上で個々の寺院・神社の状況、対馬藩及び対馬島内の政治・社会の状況や文芸・思想・学問の展開、韓国朝鮮との対外関係等をも勘案して、日本と朝鮮半島との結節点であるという特殊な環境に於いて、対馬や釜山の各寺社が、いつ頃どのような理由によって神功皇后「三韓出兵」・モンゴル来襲・応永の外寇・三浦の乱・豊臣秀吉朝鮮侵略等対外戦争の言説を纏って自らの創建と歴史とをどのように権威化・正当化していったのか、縁起言説が生成・変容していく様相とその背景を明らかにしようとするものである。

さらには対馬市内の寺社の実地踏査も行い、存廃を含めた現況の把握に務めるものとする。

3. 研究の方法

各年度共に、基本的には長崎県対馬市の長崎県立対馬歴史民俗資料館宗家文庫蔵の資料、対馬市教育委員会文化財課藤氏文書の資料を中心に、文献調査を実施。加えて平成26年度を除き、長崎県長崎市の長崎歴史文化博物館の山口文庫等対馬関連地誌神社誌の

調査をも実施した。また文献調査の合間に、厳原市街地、及び鶏知地区の神社の実地踏査も実施した。以下に各年度の調査概略を掲げる。

(1),平成25(2013)年度

、平成25年6月28日～平成25年7月1日(長崎県立対馬歴史民俗資料館宗家文庫の文献調査、及び対馬市厳原地区の神社実地踏査)

、平成25年9月28日～平成25年9月30日(長崎歴史文化博物館の対馬関連地誌神社誌調査)

、平成26年3月3日～平成26年3月6日(対馬市教育委員会文化財課の藤氏文書調査、及び対馬市鶏知地区の神社実地踏査)

、平成26年3月18日～平成26年3月21日(長崎県立対馬歴史民俗資料館宗家文庫の文献調査、及び対馬市厳原地区の神社実地踏査)

(2),平成26(2014)年度

、平成26年6月28日～平成26年6月29日(長崎県立対馬歴史民俗資料館宗家文庫の文献調査、及び対馬市厳原地区の神社実地踏査)

、平成26年12月12日～平成26年12月15日(長崎県立対馬歴史民俗資料館宗家文庫の文献調査、及び対馬市厳原地区の神社実地踏査)

、平成27年3月23日～平成27年3月25日(対馬市教育委員会文化財課の藤氏文書調査、長崎県立対馬歴史民俗資料館宗家文庫の文献調査、及び対馬市鶏知地区の神社実地踏査)

(3),平成27(2015)年度

、平成27年7月7日～平成27年7月9日(対馬市教育委員会文化財課の藤氏文書調査、及び対馬市鶏知地区の神社実地踏査)

、平成27年7月14日～平成27年7月17日(長崎県立対馬歴史民俗資料館宗家文庫の文献調査) 但し台風の為、16日午前に福岡に移動、17日帰名。

、平成28年3月1日～平成28年3月4日(長崎県立対馬歴史民俗資料館宗家文庫の文献調査、及び対馬市厳原地区の神社実地踏査)

、平成28年3月22日～平成28年3月24日(対馬市教育委員会文化財課の藤氏文書調査、及び長崎県立対馬歴史民俗資料館宗家文庫の文献調査) 但し飛行機遅延のため、初日の対馬市教育委員会文化財課での調査は中止とした。

、平成28年2月29日～平成28年3月30日(長崎歴史文化博物館蔵の対馬関連地誌神社誌調査)

なお詳細は省くが、各年度共に勤務先の個人研究費及び私費にて、長崎県対馬市及び長崎市への調査を実施した。

現地での文献調査では、書誌の調査と叙述

内容の大雑把な把握、及び撮影を行い、名古屋への帰着後、叙述内容の精査と対外戦争に纏わる縁起言説の抽出を行った。そしてそれらの縁起言説を通時的に並べて比較対照し、生成の時期と変容の時期、並びに変容の方向性を確認。その上で対馬藩の状況等をも勘案して、生成・変容の背景を考察した。

4. 研究成果

対馬の神社に纏わる神功皇后「三韓出兵」関連の縁起言説については、「1. 研究開始当初の背景」前掲既発表拙論で考察した厳原八幡宮神社のみならず、海神神社・大吉戸神社といった大社から各集落の小祠の縁起言説に到るまで、来歴の古いもの又は純粋な口承伝承と呼べるようなものではない。その始発は大凡近世中期に対馬藩の宗教統括者である総宮司職を務めた藤斎延を始めとする藤氏一門によって創作されたものであり、近世期を通じて神功皇后「三韓出兵」との関わりを強める形で増補成長していく様相を明らかにしたつもりである。特に近世後期の文化年間には、朝鮮通信使の対馬での易地聘礼を巡る朝鮮王朝・幕府との困難な交渉の最中、対朝鮮王朝観の悪化や八幡を氏神とする「源氏將軍」の徳川幕府の役人との接触を背景として、平山東山・樋口直右衛門兄弟といった藤氏の門人たちにより、大幅な増補改変が行われた可能性が高いことをも論じた。詳細は、「5. 主な発表論文等」「雑誌論文」欄記載の拙論をご覧頂ければと思うが、対馬の神社に纏わる神功皇后「三韓出兵」関連の縁起言説を近世対馬の知識人たちの創作であると結論付けたところに、本研究の意義があるものと思う。「5. 主な発表論文等」「学会発表」欄については、なるべく早期の論文化を目指したい。

応永26(1419)年6月の応永の外寇を巡る言説・及び糠岳南の殿様壇・卯麦軍殿神の縁起言説については、近世対馬の文献群に載る言説・寺社縁起言説は、朝鮮王朝側の資料や中世期の古文書等から把握できる歴史的事実とは異なり、既に前年に病死していた島主宗貞茂を幼くして跡を継いだ貞盛に代わって戦闘に参加させ、文献によっては戦死させてもいる。また永正7(1510)年4月から6月に起きた三浦の乱を巡る言説・及び戦死した宗盛弘を祭神とする五根緒の高崎神社の縁起言説に関しては、やはり近世対馬の文献群に載る言説・寺社縁起言説は、何れも朝鮮王朝側の資料や中世の古文書類から把握できる歴史的事実とは異なり、宗盛弘に万余の朝鮮王朝の軍勢を討ち取らせる等、顕著に活躍させている。さて、近世期に対馬藩内で作成された『宗氏家譜』等の宗氏の系図類を繙いてみると、実際には応永の外寇当時対馬島主であった貞盛の子孫は子成職で断絶し、貞茂の別の子(貞盛の弟)である盛国の子孫が系譜上対馬藩の藩主へとつながっていく。また三浦の乱で戦死した宗盛

弘は対馬島主になったことはないが、対馬藩主宗氏の系譜は盛弘の実子・将盛から出ている(なお盛弘は盛国の孫にあたる)。応永の外寇に関連した研究発表は「5. 主な発表論文等」「学会発表」欄、三浦の乱に関連した研究発表はに該当するが、両研究発表共に、こうした歴史的事実を無視した朝鮮王朝との対外戦争をめぐる言説が近世の対馬で発生する背景には、恐らくは近世の対馬藩藩主宗氏による直系の祖先たちの顕彰と、日本の幕藩体制の一員として朝鮮王朝に対峙している自藩の立場(いわゆる「朝鮮押さえ役」)を過去から続くものと主張する狙いがあったものと論じた。従来の応永の外寇・三浦の乱をめぐる研究は、歴史学的視点から、歴史的事実を明らかにすることに力点が置かれ、近世の対馬での言説は間違いとしてあまり顧みられることがなかった。もちろん歴史的事実を明らかにすることは、学問上重要なことである。しかし一方で中世近世の文書が多く残存し、且つ朝鮮王朝の文献も積極的に入手していて朝鮮王朝の実情に精通していたはずの対馬藩に於いて、何故歴史的事実とは異なる言説が伝えられてきたのか、そもそも何故そうした歴史的事実とは異なる言説が発生したのかという点にも何か意味があるはずである。そうした問題点に着目し、対馬藩の置かれていた状況をも踏まえつつ明らかにしようと試みた点に、2度の研究発表の意義があるものと思う。なるべく早期の論文化を目指したい。

なお、本研究の期間外ではあるが、本研究にて調査した文献を基にして、既に対馬に伝わる素盞烏が子息五十猛を引き連れて対馬から朝鮮半島へと往来したとする伝承についても考察し、研究発表を行った。そして朝鮮の始祖壇君と素盞烏を同体とする言説をも含むこの伝承が、近世中期に対馬藩内、恐らくは総宮司職藤氏周辺で、『日本書紀』『一書曰』の記述を基に創作されたものであること、経年と共に対馬藩内での対朝鮮王朝観の悪化を背景として、対馬島内でこの伝承を縁起言説に取り込んだ神社、また素盞烏や五十猛等伝承に関連する祭神を祀る神社が増加していく傾向にあること、またそうした流れは近代以降も止まらず、明治期後半に釜山の龍頭山神社に素盞烏が合祀されるに至ったこと等を論じた。「5. 主な発表論文等」「学会発表」欄に該当するものであるが、なるべく早期の論文化を目指したい。

総じて、異国との平和時の文化的なものであれ戦争であれ交流を巡る文芸の研究、また近世の各藩が生成してきた藩主の系譜や領内の歴史言説を巡る研究は、例えば前者が青山学院大学文学部日本文学科編『日本と異国の合戦と文学』(2012年10月 笠間書院) 後者が志立正知氏『歴史を創った秋田藩モノガタリが生まれるメカニズム』(2009年1月 笠間書院)を代表として近年相次いで公表されており、日

本の文学文芸研究の中で、相応の位置を占めている。そうした状況の下、その両方と関わる本研究はそれなりの意義を有するものであると思われる。本研究に於いては、当初はモンゴル襲来や豊臣秀吉の朝鮮侵略に関しても考察を進める予定であった。しかし見通しが甘く、神功皇后「三韓出兵」だけでも学会発表5度、雑誌論文3本(現在執筆中のものを含めると5本)と予定より大掛かりな研究となったため、行い得なかった。今後は今までの研究を、精度を高めつつさらに進めると共に、モンゴル襲来や豊臣秀吉の朝鮮侵略に関しても機会を改めて考察を行うこととしたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3件)

徳竹 由明「対馬・海神神社縁起説の形成」(『説話・伝承学』23号 2015年3月) P169～P182 査読有

徳竹 由明「対馬に於ける神功皇后「三韓出兵」伝承の形成 往路の神社縁起説を中心に」(『説話・伝承学』24号 2016年3月) P95～P108 査読有

徳竹 由明「対馬に於ける神功皇后「三韓出兵」復路伝承の形成」(『軍記と語り物』51号 2016年3月) P90～P101 査読有

[学会発表](計 8件)

徳竹 由明「対馬・海神神社縁起説の形成」(説話・伝承学会2014年度大会 2014年4月27日 中京大学名古屋キャンパス・愛知県名古屋市)

徳竹 由明「対馬金田城築城・大吉戸神社創建を巡る言説と神功皇后「三韓征伐」譚」(軍記・語り物研究会2014年度大会 2014年8月25日 四天王寺大学藤井寺駅前キャンパス・大阪府藤井寺市)

徳竹 由明「対馬に於ける神功皇后「三韓征伐」伝承の形成 往路の寺社縁起説を中心に」(説話・伝承学会2015年度大会 2015年5月3日 京都女子大学東山キャンパス・京都府京都市)

徳竹 由明「対馬に於ける神功皇后「三韓征伐」復路伝承の形成」(軍記・語り物研究会2015年度大会 2015年8月25日 東洋大学白山キャンパス・東京都文京区)

徳竹 由明「近世対馬に於ける三浦の乱

を巡る言説と高崎神社縁起説」(異域の会国際シンポジウム 2015年11月7日 青山学院大学青山キャンパス・東京都渋谷区)

徳竹 由明「対馬に於ける応永の外寇を巡る言説」(関西軍記物語研究会第85回例会 2015年12月13日 大阪工業大学うめきたナレッジセンター・大阪府大阪市)

徳竹 由明「対馬に於ける「素盞烏」伝承の変容」(説話・伝承学会2016年度大会 2016年4月24日 同志社大学今出川校地・京都府京都市)

徳竹 由明「『対州古蹟集』所収・神功皇后「三韓出兵」往路に関する異伝について、並びに『対馬記』を巡る二・三の問題について」(伝承文学研究会名古屋例会平成28年5月例会 2016年5月22日 中京大学名古屋キャンパス・愛知県名古屋市)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

徳竹 由明 (TOKUTAKE, Yoshiaki)
中京大学・文学部・教授

研究者番号：30387609